

[特別活動]

つながりを生む学級づくり

— A子への支援・指導を中心に —

笠尾 民子*

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

新学習指導要領における特別活動の目標では、「人間関係」が新たに加えられ、「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」とされた。さらに「学級活動」の目標には、「望ましい人間関係を形成」、「よりよい生活づくりに参画」、「諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる」というキーワードで、活動を通して育む生徒の態度、能力が示された。

現任校では、昨年度中学1年生を担当した。3つの小学校から中学校に入学した当初は、幼い言動による男子生徒のトラブルが発生したり、女子生徒には、小学校当時のマイナスの人間関係を引きずり、新しい友達づくりを進める上で新たな対人トラブルが多く見られたりした。

生徒を支援・指導する中で、自ら他者と関わる力の弱い生徒や、どのように他者と良好な関係を結んだらよいかなど、方法が分からない生徒が多くいることを痛感した。中でも、A子の仲間との関わり行動に目が止まった。中学校に入学して新しい友達を作りたいと目標をもっているA子だが、朝の挨拶が自然にできないなど、具体的な行動がほとんどできない状態であった。

そこでA子に視点を当て、A子が他者とのつながりを深め、つながりを実感できるための指導の工夫を通して、望ましい人間関係の形成と、より良い生活づくりに向けた学級づくりに取り組んだ。

(2) 「つながり」についての定義

東日本大震災以降、特に「つながり」「絆」という言葉が大きくクローズアップされている。「つながりとは①つながること。また、そのもの。②きずな。連繋。関係。」(広辞苑2008)と示されている。新井田・黒川(2010)は、つながり「相互理解を深めること」としている。時岡(2010)によれば、「自尊感情を高めるには、その基盤にありのままのその子を認める温かい雰囲気や、つらい状況にあるときに励まし支える、『つながり合う』集団(仲間)が不可欠である。」とある。本研究では、A子と学級の成員との関係づくりの方向性を明らかにするために、この「つながり」の定義を「双方向の意思の表出(コミュニケーション)」と捉えた。また、「つながり」を生む望ましい人間関係を形成する学級とは、まず自分自身の存在をかけがえのないものであると認めた上で、自分と同じように学級の仲間を大切にしてお互いを認め合い、より良く共に成長しようとする学級であると筆者は考える。

(3) 対象生徒について

A子は現在中学2年生である。小学校からの生徒指導上の引継では、他の児童との関わりスキルの不足、いじめに近い人間関係のトラブルがあったと聞いている。筆者は中学1年生よりA子を担当している。2年生進級時のクラス替えの際も、A子自身が安心して学校生活を送ることができるように、A子に協力的な仲間を配慮して学級編成を行った。

6月に実施したQ-Uテストでは、「学校生活不満足群：承認感・安心感が乏しく、個別・緊急対応を要する生徒」という結果で、孤立傾向を危惧していた見方と一致した結果であった。特に、ソーシャルスキルの「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」が共に不足(欠如)していることも、このQ-Uテストから明らかになった。A子が他者を思いやり、他者と関わる力を身に付けることにより、学級の成員とより良くつながることができると考えた。また学級づくりにおいても、生徒同士のつながりを生む様々な支援・指導を通して、生徒個々の自己肯定感や自己有用感を向上させ、学級集団としてのまとまりを生み出したいと考えた。

2 研究の目的

本研究の目的は、A子が自信をもって仲間とのつながりを深め、学級の成員同士のつながりが増えた状態をつくる

* 上越市立三和中学校

ことである。A子が他者とのつながりを深めるための支援・指導の工夫を通して、望ましい人間関係を形成できる学級の成員同士のつながりをつくるために、2つの視点を置いた。1つは、A子が自信をもって仲間とつながりを深めることができるための、A子とのコミュニケーションづくりであり、もう1つは、学級の成員同士のつながりを充実させるための、学級の雰囲気づくりである。

近年、学級づくりに主眼を置いたQ-Uテストの効果とその有効性が示されている。また、学級を1つの単位とした集団SSTが実施され、集団SSTによってソーシャルスキルの獲得の促進が図られていることも明らかになってきている。(村山 2007)しかし、SSTの手法を応用した多面的な取組とQ-Uテストを併用して、個の生徒への支援・指導を中心に据えた学級集団づくりを明らかにした先行研究は見て乏しい。本校は昨年より3年間の研究指定を受けて、Lions Quest「思春期のライフスキル教育」プログラムの研修と実践を行っている。Lions Quest「思春期のライフスキル教育」プログラムとQ-Uテストを併用し、学級(または班)での様々な取組が、A子が他者とのつながりをもち、同時につながりを生む学級づくりのために有効な手立てとなることを検証する。

3 実践研究の方法

(1) 対象となる生徒と集団 A子とA子を含む27人(2年時は26人)学級

① A子の実態 当校入学後のA子の実態は次の通りである。

表1 入学後のA子の行動観察より

生活面	学校規則を守り、日直・係・清掃等の当番活動に一生懸命取り組む。声が小さく、自分から発言することはほとんどない。行動する際に緊張で体がこわばり、自然な動きができない時がある。走力はあるが、自分の正面で腕を不自然に上下させて走る。周りの生徒の動きを見て、恐る恐る動くことが多い。生活記録帳で記述する目標行動と実際の行動に大きな差がある。
学習面	授業に集中して取り組むことができる。班内での話し合い活動は、班員の話を聞くのみで、自分から意見を出すことはほとんどない。小学校より塾で学習している英語の力はSS61と高い。NRTは52(平成23年2月実施)。体力テストの総合評価は「C」である。
人間関係	自分で仲間の輪に入ることができない。仲間が声掛けすると、何とか首を縦・横に振る程度で、どのように対応・反応したら良いか分からない様子である。仲間との対応を筆者に依存することがあり、個別相談でも自分の思っていることを、筆者に上手く伝えられず泣くこともある。

A子自身、またA子を取り巻く周囲の人々のA子に関する困り感は次のようである。

表2 入学後のA子を取り巻く困り感

A子自身	友達ができない。どのように声を掛けて良いか分からない。教室移動の時一緒に移動したり、昼休みを過ごしたりする友達がほしい。仲間から認められたい。(1学期副級長へ紙面で立候補)
学級の仲間	問い掛けや挨拶に、明確な対応がないA子に対して戸惑う。話し合い活動では班員の意見に同調するが、A子自身の考えが分からない。一人きりであるA子にどのように声を掛けるのか戸惑い、何となくA子一人をそのままにしてしまう。
担任	A子の目標行動と、実際の行動に大きな隔りがあることを自覚させ、自分を仲間に入れてくれないという、A子の仲間に対する不信感を払拭したい。筆者を介したA子と仲間とのつながりを、A子と仲間とのつながりにさせたい。そして、他者との関わりのスキルを見に付けさせたい。自分で諸問題を解決する力を身に付けさせ、自信をもって楽しい学校生活を送ってほしい。
保護者	友人をたくさん作って楽しい中学校生活を送ってほしいと思います。(新入生提出資料による子どもへの願い欄の記述より)

② 学級の実態

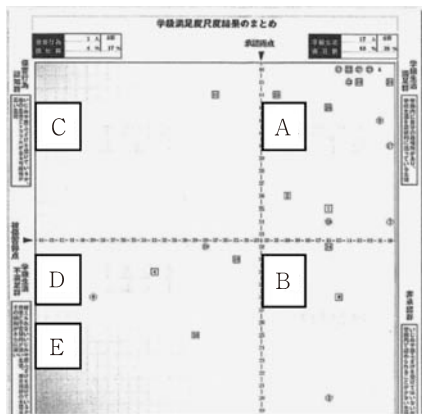


図1 学級満足度尺度結果

A子が1年生の6月に実施したQ-Uテストの学級満足度尺度結果(図1)を見ると、学級生活満足群(A群)は27人中17人(学級比63%)、非承認群(B群)は4人(学級比15%)、侵害行為認知群(C群)は1人(学級比4%)、学級生活不満足群(D群)は5人(学級比19%)、要支援群(E群)は0人であった。

また、学校生活意欲総合点(100点満点)の分布を見ると、80点以上が18人、67点以上79点が6人、54点以上66点が3人であった。

このQ-Uテストの質問項目の中で、本研究における他者との「つながり」の視点=双方向に意思を表出するコミュニケーションに係る2つの質問項目に着目した。「人と仲良くする方法を知っている」の得点が低い生徒が4人、「班をつくる時、班に入れず残ってしまうことがある」の生徒が4人いた。他者との関わりのスキル不足や、学級での居場所を必要とする生徒の存在が明ら

かになった。A子もこの2つの項目で低い得点であった。

本研究の目的を達成するために、A子の指導・支援を中心に、所属する学級（班を中心とする）集団を基盤として、つながりを生む学級づくりを目指したい。なぜなら、A子とA子の所属する（A子と関わりの中心となる）集団が質的に成長することで、本研究の目的が達成されると考えるからである。

(2) 実践項目（中学1年生から中学2年生7月）

A子が他者とのつながりをもち、同時につながりを生む学級づくりのために、「2 研究の目的」の中で掲げた2つの視点から、5つの実践を行った。

① 視点1 A子とのコミュニケーションづくりのために

- ア 実践1 A子への関わり行動 個別の支援・指導
- イ 実践2 学級の成員とのつながりをつくるための実践と支援・指導（実践5のQ-Uテストも活用）

② 視点2 学級の雰囲気づくりのために

- ア 実践3 Lions Quest「思春期のライフスキル教育」プログラムの導入
- イ 実践4 日々の指導の工夫 学活・道徳・総合の時間、各教科における班を基盤とするつながりを生む取組
- ウ 実践5 計4回のQ-U（学級満足度調査）テストによる学級の状態の点検と今後の課題の確認

4 研究の実践

(1) 実践1 A子への関わり行動

A子の6月のQ-Uテスト結果を見ると、A子は他者に対する思いやりを表現するスキルと、他者との関わりのスキルの数値がともに低く、他者と好ましい意思の表出ができる力を早急に身に付けさせることが不可欠であった。A子との双方向のコミュニケーションができること、まずはA子と筆者との「つながり」を深めることを目指して、以下のような支援・指導を行った。

- ・デイリーライフによるつながり（筆談による会話）
- ・面接（教育相談、チャンス相談）
- ・アンケート・作文（タイムリーで、節となる活動での言動の把握）
- ・Q-Uテスト（個人と学級の成員とのつながりを客観的に分析・課題の把握）
- ・振り返り、面接などあらゆるツールを用いて、筆者とA子とのつながりを深めていった。

(2) 実践2 学級の成員とのつながりをつくるための実践と支援・指導（視点2の学級の雰囲気づくりも含めて）

Q-Uテストにおいて親和的な学級風土づくりをますます推進することを意識して様々な指導を工夫した。2学期以降は、学級目標をより意識させながら、生徒の考えを生かした主体的な活動の両軸で学級経営を進めた。当校の三大行事の2つである「体育祭」と「音楽祭」、部活動での「市内大会」や「新人戦」を、学級成員のつながりを生む絶好の機会と捉え、「学級全体でつながる」を合言葉にして実践を行った。以下に示す実践4とも関連するが、筆者とのつながりから、A子が学級の成員とつながるための支援・指導・交流場面を設定した。班・係だけでなく、部活動、仲間づくり活動による小集団など、様々な仲間との関わりを通してA子に仲間とつながるスキルを支援・指導したり、賞賛したりする機会とした。

(3) 実践3 Lions Quest「思春期のライフスキル教育」プログラムの導入

Lions Quest「思春期のライフスキル教育」プログラムの最終目標は、①互いを尊重し、高い期待感を抱き、意味のある参画ができる学習集団作り、②健康で生産的な生活をするのに必要なライフスキル学習の指導、③薬物（喫煙・飲酒）を使用しない、安全で健康な生活の促進、④市民の一人として、他者との協調、助け合いを促進、⑤家族、よき友人、学校、地域とのつながりの強化とある。（特定非営利法人 青少年支援フォーラム 2009）昨年の夏に講師による研修（ワークショップ）を受けた後、2学期よりA子、また学級の実態を見ながら数回この取組を実施した。以下はその授業実践の一部である。

- ・取組1 単元1 十代の始まり：待ち受ける試練（オリエンテーションと名前の学習）
- ・取組2 単元1 十代の始まり：待ち受ける試練（学級の基本ルールづくり）
- ・取組3 単元2 本当の自信とコミュニケーションスキルの形成（上手に聞く方法を学ぶその1）
- ・取組4 単元2 本当の自身とコミュニケーション（上手に聞く方法を学ぶその2）

(4) 実践4 日々の指導の工夫 学活・道徳・総合の時間、各教科における班を基盤とするつながりを生む取組

① 朝学活・終学活のプログラムの工夫

- ア 「〇秒で□□の話聞いて（聞くよ）。」・・・生徒同士のペアワーク。（席替え、班・係替えの時など）
- イ 絵本の読み聞かせ・・・教師主体による一斉読み。班単位による生徒同士の絵本の読み聞かせ。

- ウ 「じゃんけんエクササイズ」…学級や班単位による「あっち向いてほい」、「〇〇について質問タイム」などの活動。
- エ 「家族の〇〇になったつもりでお話を」…学年PTA、学期終了前、テスト前など、保護者役となるロールプレイ。
- ② 学級だよりや振り返り、作文による紙面交流…仲間（時に保護者から）の思い・願いを共有する場づくり。
- ③ 部活動別、班対抗定期テスト大作戦…定期テスト前に、勉強時間を相談・実行・記録・表彰。
- ④ 「学活」の時間の定期的取組…クラスのみんなから〇〇さんへ贈る1行ラブレターづくり。
学期の終わり、行事の後などに実施する。1人約1分位で、「〇〇さんのここがすごい」、「頑張ったね。」等、プラスのメッセージを書き、最後に自分の手元に届く紙面交流の活動。
- ⑤ 「道徳」の時間の実践
- ア 「あいだみつを」さんの詩「花を支える枝」を用いた実践。学年交流を含む「学年道徳」を実施。自分とつながる人、自分を支える人への気付きと、感謝の心を伝える活動。
- イ 「あいさつ」をあらためて考える。あいさつに関わるCMの歌を用いた話し合い活動と、「つながる」メッセージ交流。
- ⑥ 「学活」・「総合的な学習」の時間…級長会・学級厚生係の創意工夫を生かした「仲間づくり活動」による定期的な学年・学級交流。
- ⑦ 「国語科」の時間を通しての社会とのつながりを生み出す取組
- ア 詩人「工藤直子」さんへ動植物を主人公にした創作詩の送付。→ 教科書出版社より丁寧な返事があり、学年で感激。
- イ 環境省（環境大臣）への環境問題解決のための提言書の送付。

Lions Quest「思春期のライフスキル教育」プログラムで扱われる内容を参考にしながら、応用・発展的实践として、①～⑦のような様々な時間や形態を用いて指導を工夫した。また、2年生の7月に行われる5日間の職場体験学習に向けて、6月に外部指導者による「マナー講座」を実施した。A子は「笑顔で、大きな声で、ていねいな言葉であいさつすること」の大切さを、実際のスキルトレーニングを通して実感した。A子の姿と、学級の姿の2つの視点で「今、どのような支援・指導がA子と学級に必要か。」をとということ、常に意識して支援・指導を工夫した。

(5) 実践5 計4回のQ-U（学級満足度調査）テストによる学級の状態の点検と今後の課題の確認（実践2とも関連）

- ① A子に視点を当てて 学級での居心地度や、他者との「かかわりのスキル」・「配慮のスキル」の向上を点検する。5つの実践において、A子のスキル向上のための支援・指導を行い、段階的にA子の成長を褒めながら、次の目標を設定していった。
- ② 学級に視点を当てて 集団の凝集性を測定できるQ-U（学級満足度調査）テストを実施して、今後の支援・指導の手掛かりとする。1回目のQ-Uテストでは、「ややかたさの見られる学級」という学級集団の特徴を示した。そこで実践3・実践4を通して、筆者だけでなく学級の仲間同士や他の教師から、様々な視点で「振り返る」「認め合う」「評価される」場面を多く設定した。

5 実践研究の成果

(1) 視点1 A子とのコミュニケーションづくりにおいて

① Q-Uテストを活用した成果

2回目のQ-Uテストで要支援群の結果を示したA子と話をすると、より「友達と近づきたい」と願うA子の思いと、学級の成員がA子に対して抱く「A子は、自分から積極的に動かない。」という、互いの溝が明らかになった。A子と、班を基盤とする学級の成員とをつなげる取組を継続した結果、4回目の学級満足度尺度結果では、A子は学校生活満足群（かなり高得点の位置）に属した。A子と班を基盤とする集団と関わりにおいて、特に女子の間で一緒に過ごす仲間を固定化する（したがる）傾向を打破し、「いつでも・どこでも・誰とでも『つながる』集団」へと成長するための、上記の実践は有効であったと言える。Q-Uテストを活用した段階的なA子への支援・指導の一助として、Q-Uテストは効果的であった。

しかしA子の3回目のソーシャルスキル結果を見ると、A子以外の生徒が「配慮」の尺度、「かかわり」の尺度ともに平均の評定3以上を得点しているのに対し、A子1人だけが「かかわり」の尺度は評定1、「配慮」の尺度は評定1

であった。学級の仲間と積極的につながりたいと願うA子に、より自信をもたせるために今後とも継続したスキル学習の取組の必要が明らかとなった。

表3 Q-Uテストから見るA子の学級満足度尺度結果

実施回	1回目	2回目	3回目	4回目
時期	平成22年6月	10月	平成23年5月	7月
被害得点	39	32 (+7)	22 (+10)	18 (+4)
承認得点	28	25 (-3)	32 (+12)	40 (+8)
学級満足度結果	学校生活不満足群	要支援群	非承認群	学校生活満足群

② A子の記述内容と行動の変化

時間を追ってA子の記述内容を見ていくと、圧倒的に自分自身の成長に関することや、仲間や学級との関わりに関する記述が多くなってきた。また、A子自身も自分の行動を変えたいという意識・意欲が向上し、仲間とつながることのうれしさ・楽しさを実感していることが分かる。以下は、A子の記述内容の変化である。

ア 入学後1か月 校内保健指導による生活アンケート項目より抜粋

- ・「ありがとう」「すみません」がすぐ言えますか。…はい (←実際の場面では言えない。)
- ・今、一番欲しいものは何ですか。…友達

イ 1年生3学期 1年間の振り返り自己評価用紙より

- ・良かったと思う所は、何でも一生懸命取り組んだことです。2年生になって直していきたいことは、笑顔でいろんな人と話すことです。何にでも中途はんぱだったので、きっちりさせていきたいです。
- ・私が成長したことは「いろんな事に対する気持ち」が高まったことです。体育祭では、負けたくないと感じる気持ち、「音楽祭」では優秀賞をとりたいと思う気持ちが高まりました。2つの行事を本気でやっていたからそう思えたのだと思います。

ウ 2年生初め 日直当番活動 学級日誌 1日の感想・記録より

- ・2年生で初めての日直をしました。1年生の時よりも、声が大きくなったと思うので良いと思いました。日直の仕事も忘れずにできたと思います。(4月)
- ・今日は「体力テスト」がありました。昨年より記録が伸びている人がたくさんいると思います。学年レク(鬼ごっこ・ドッジボール)をやりました。2年生全員が楽しくできたと思います。学年レクは、昨年より良くなっていると思います。体力テストの結果が楽しみです。日直の仕事もできたと思います。(5月)

エ 2年生5月 全校行事「がんばり遠足」より

- ・自分の成長を感じた所は、友達に話したいことを話せるようになったことと、1年間ソフトボール部に所属して、途中で苦しくならず、自分が走りたいと感じたらいつでも走ることができるようになったことです。

〈補助資料〉 保健・体育科「新体力テスト」(5月実施)の結果から見る昨年との比較分析

- ・1年時総合評価がC判定であったが、全ての体力テスト項目の数値を上げ、2年時総合評価はB判定であった。2年生女子の中で一番の伸び率であった。全体でも女子6位の成績であり、体力の向上も本人の意欲や自信を高める一因と考えられる。
- ・ソフトボール部員として、部活動の集団帰属意識と、2年生として自覚をもち1年生の手本となるべき行動をしなければ…(部活ノート、生活記録帳記録より)とあり、体力の向上もA子の積極性を向上させる一因となっている。

オ 2年生7月 職場体験学習(7月11日より5日間)

- ・個人目標 「話し上手・聞き上手になる。」
- ・職場体験学習を終えて

今後がんばりたいことは「積極的に動くこと」、「大きな声で話すこと」です。積極的にがんばることはできましたが、遠慮した面があったのでそこをがんばりたいです。最初から大きな声でやってきたいです。日常生活が、そのまま職場体験でよく出るなあと感じました。まず家で手伝いなどしていると、自分から動くことができたり、任された仕事をきちんと行ったりすることができると思うからです。福祉施設で、様々な場面の中でデイサービスを利用する方が、笑顔になる機会が1つでもあるのだということを学びました。仕事も覚え、入浴の手伝いや送迎の補助など、「ありがとう。」と言ってもらえるのでうれしかったです。今後、

人とコミュニケーションをとったりする職業につきたいです。職場体験を今後の活動に生かしていきたいです。

カ 2年生 9月の体育祭に向けた意気込み

- ・個人行動目標 ①全力で応援する。 ②委員会の仕事（競技運営）をがんばる。 ③実力を発揮する。
- ・体育祭を通じたクラス（紅軍）目標 つながりのあるクラスにして明るい感じにする。

(2) 視点2 学級の雰囲気づくりにおいて

この4回のQ-Uテストを通じて、学級集団の特徴が1回目の「やかたさの見られる学級」から、2回目以降「親和的な学級」へと学級集団として成長を遂げた。3回目のテスト以降は、2年生に進級後のクラス替えを行った学級のデータであるが、A子が「つながる」中心母体である学級集団としてこの結果を見ると、A子を受入れやすい集団として成長していると捉えることができる。

加えて、回を重ねるにつれて図1のB・C・D・E群のいわゆる配慮・指導を要する生徒数は次第に減少した。Q-Uテスト1回目のB群からE群の総合計10人→2回目7人→3回目6人→4回目2人であった。またソーシャルスキル結果のまとめ（3回目）を見ると、「配慮」の尺度は32.7と全国平均を2.4ポイント上回っていた。「かかわり」の尺度は29.9と全国平均を2.6ポイント上回っていた。学級集団の成長と同時に、A子もより良い行動変容を見せていることを加味すると、A子と学級集団との双方向のポジティブなつながりが見て取れる。

「つながり」を生む望ましい人間関係を形成する学級とは、まず自分自身の存在をかけがえのないものであると認めた上で、自分と同じように学級の仲間を大切にしてお互いを認め合い、より良く共に成長しようとする学級であると筆者は定義した。学級集団が自己満足によるものでなく、仲間とのつながりをより強固なものにしたいという思いや行動が、振り返り・評価・目標等の中から生まれ、そして実際の生徒の自主的な活動の場面で多く見られたことが、成果として挙げられる。

6 今後の課題

2年生進級当初、保護者からA子に宛てた記述には、「『目配り・気配り・心配り』ができるようになってほしいです。体験学習で大人へのステップアップができるかな？」と、保護者の願いが記されていた。7月の職場体験学習を終えて、保護者からA子に宛てたメッセージでは、「様々な年配者が相手に、言っていることは理解できるが話ができない方と接することによって、自分のためではなく人のために～をするという喜びはかけがえのないものです。いろいろな失敗を繰り返し、ピンチをチャンスに変えていける力をつけていって下さい。」とあった。

A子の他者との関わりのスキルを向上させるために、日常の様々な場面を捉えて意図的・計画的な指導を継続する。何よりもA子が、より学級の仲間とのつながりを求め、積極的に自分を変化・成長させたいと意欲を高めているからである。2学期副級長に5名の生徒がA子を推薦した。班長を任せられ、班の教え合い学習で得意の英語・数学などを丁寧に教えたり、にこやかに挨拶を交わしたりするA子をより成長させたい。そしてA子の夢である人とコミュニケーションをとる仕事（通訳者）になるための支援をしたい。

また、つながりを生む学級づくりのために、体育祭を終え、新人戦、音楽祭と学級単位のより親和的なムードを高めるために「つながり」を合言葉に、2学期以降は生徒自身の主体的な活動をより一層強固に推進していく。生徒会の中心となる生徒会選挙に向けた学校リーダー集団へと意識を向上させ、修学旅行を通して自分・班・学級・学年・社会とのより密度の濃い「つながり」を作りだしていきたい。

引用・参考文献

- ・文部科学省 中学校学習指導要領解説 特別活動編 2008年
- ・時岡裕子 「人権教育を基盤とした集団づくりの在り方」 福井県教育庁嶺南教育事務所研究紀要第14号 2010年
- ・新井田義一・黒川 健 「子どもたちの一体感を醸成する中1ギャップ解消事業の推進」 上越教育大学学校教育総合研究センター 『教育実践研究第20集』2010年、229-234pp
- ・新村 出 「広辞苑」 岩波書店 2008年
- ・村山重樹 「望ましい人間関係を目指した学級集団の育成」 上越教育大学学校教育総合研究センター 『教育実践研究第17集』 2007年、109-114pp
- ・特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム (JIYD) 「Lions Quest『思春期のライフスキル教育』プログラム」 2009年